

夏目漱石

長塚節氏の小説「土」



長塚節氏の小説「土」



一方にこんな考えがあつた。――

好<sup>よ</sup>い所を世間から認められた諸作家の特色を胸に蔵して、その標準で新しい作物さくぶつに向うと、まだその作物を読まないうちに、早くすでに型に墮在している。したがつてわが評論は誠実でも、わが態度は独立でも、またわが言説の内容は妥当でも、はじめからこつちに定まつた尺度を持っていて、その尺度で測つてならないものまでも律したがる弊が出る。その結果は働きのない死んだ批評

に陥おちいつてしまうことがよくある。

それよりか、今日こんにちまで文壇に認められなかった、もしくは顧みられなかった、新しい特殊な趣味を、ある作物のうちに見出して、それを天下に紹介するほうが評家にとって痛快な場合が多い。またその特殊な趣味が容易に多数に肯うけがわれなるところを、決然身を挺して唱道するところが、評家会心の点らしい。文壇はこれがために、新領土を手に入れたと同じわけになるからである。

一方にまたこんな事実があった。——  
近ごろ文芸の雑誌がしきりに殖ふえる。毎月活版に組ま

れる創作の数もよほどの数に上ってきた。評論の筆を執るものが、いちいちそれを熟読する機会を失った。余のごとき自家の職業上、文芸の諸雑誌に一応眼を通すべき義務を感じていてさえ、多忙のため果さざる月が多い。

ようやく手の隙すいたところを見計みつて、読み落した諸家の短篇物を読んでゆくうちに、無名の人の筆に成ったもので、名声のある大家の作と比べくらべて遜色そんしよくのないもの、あるいはある意味から言って、かえってそれよりも優すぐれていると思われるものがまゝ出て来た。そうして当時の

評論を調べてみると、これ等の作物がまったく問題にな  
 っていない。青木健作氏の「虻」あぶなどは好例である。

型に入った批評家のために閑却され、多忙のため不公  
 平を甘んずる批評家のために閑却されては、作家（こと  
 に新進作家）は気の毒である。時と場合の許す限りそう  
 いう弊は矯正きょうせいしたい。「朝日」に長塚節ながつかたかし氏の「土」を  
 掲げるのもいくぶんかこの主意である。

二三年前節氏の佐渡記行を読んで感服したことがあ  
 る。記行文であつたけれども普通の小説よりも面白おもしろいと  
 思った。氏はまだ若い人である。しかも若い人に似合わ

ず落ち付き払って、行くべき路みちを行って、少しも時好を  
追わない。これはわざと流行に反対したのなんのという  
むずかしい意味ではなくて、氏には本来芸術的な一片の  
性情があつて、氏はたゞその性情に従うのほか、他を顧  
みる暇を有もたないのである。余はその態度を床ゆかしく思つ  
た。

もつとも今度載せる「土」の出来栄できばえは、今から先を見  
越したような予言ができるほど進行していない。最初余  
から交渉した時、節氏は自分の責任の重いのを気遣きづかつて  
長い間返事を寄こさなかつた。それからようやく遣やつて

みようという挨拶あいさつが来た。それから四十枚ほど原稿が来た。予告はこの原稿と、氏の書信によつて、草平そうへい氏が書いた。今のところ余は「土」の一編がうまく成功することを氏のために、読者のために、かつ新聞のために祈るのみである。

有名な英国の碩学せきがくミルは若い時、同じく若いテニソンをロンドン・リポトリ紙上に紹介して、なおその次号にブラウニングを紹介しようとした。主筆から彼の批評はすでに前号に載せたという返書を得て調べてみると、  
ページの最後の一行にたゞ「ポーリンこれはせんげん謔言なり」と

あつた。同雑誌の編集者が一行余つた処ところへ埋草うめくさに入れたものである。ブラウニングは後年人こうねんに語つて、あの批評のために自分が世間に知られる機会が二十年後おくれたと言つた。

余が新しい作家を紹介するのは、ミルをもつてみずから任ずるといふより、かゝる無責任な評論家の手から、望みのある人を救おうとする老ろう婆ぼ心しんである。

(明治四三・六・九)



日本文学電子図書館

---

長塚節氏の小説「土」

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第7巻」角川書店  
昭和42年 6月30日 6版発行

---

日本文学電子図書館